

しあわせ
の^み実



ほらかな



きょうから モモのしゅうかくだ。

ぼくは たべてくれる人のえがおを
そうぞうしながら ころをこめて
このモモをそだててきた。

これは そんなぼくが、子どものころにけいけんした
とんでもなくふしぎでわくわくして、
わすれられないできごとのおはなした。

子どものころのぼくは、はずかしがりやで
なんだかじしんのない男の子だった。
そんなぼくにある白、とうさんはいった。

「あの山には“しあわせの実”があるっていう
いいつたえがあるんだよ。
ただおいしいだけじゃない。
人を元気づけ、本もののしあわせがわかる
ふしぎな力のある実なんだそうだ。」

ぼくはどうしてもその実がたべたくなった。
どんなあじがするんだろう。
本もののしあわせってなんだろう？
気づけばぼくはその実をさがしに
山をあるいていた。



あるいてもあるいても、その実は見つからなかった。
かわりに、かれ木にはさまって
出られなくなったシカをみつけた。
ぼくが、からまったえだを一つずつとってやると、
シカはぼくのかおをべろべろなめてはしていった。

いつのまにか 白はすっかりくれていた。ぼくは
しあわせの実のことはあきらめてかえることにした。
かえりみち、ぼくはなにかにつまづいた。
どろだらけのそれは、じょうろだった。



ぼくはじょうろを いえにもちかえり、にわであらった。

あらうとじょうろは、みどりいろにかがやいた。

さっそくじょうろで みずをかけたそのしゅんかん

おかしなことがおこった。

水がかかった土の上から

ぴょこんと め が出てきたのだ。



そのめはキシキシ音をたてて大きくなり、

えだがつぎつぎにのびた。

はっぱがたくさん出てきたが、きいろくなり

やがてパラパラとおちた。そして・・・



ためしよみ

は

ここまでです